

もう二つのメディア

元関西外国語大学教授
金谷 信之

メディア(media)とは、メディウム(medium)の複数形であり、何事によらず「媒介する物」という意味である。しかし、現在一般には、専ら、情報伝達を媒介する「情報メディア」の意味に用いられており、なかでも、新聞・出版・放送・映画など、多数者に向けて発信するマスメディアの意味に用いられている。

しかし、今日のように情報化が進展する以前の時代、メディアと云う言葉は固有名詞であって、国名であり人名であった。すなわち、前7世紀頃古代オリエントに栄えた国の名であり、ギリシャ悲劇において魔女として知られた女性の名であった。

【古代オリエントのメディア王国】

メディア王国は、イランの北西部のザクロス山脈の山岳地帯から興り、紀元前7世紀頃には、イラン・アッシリア・カッパドキア・バクトリアをも領した広大な王国であった。



図1 古代オリエント

メディア人は、もともとは南ロシアのステップ地帯で半農半牧の生活を営んでいたが、次第に南下して、オリエント世界に進出してきたイラン系民族の一部族であり、後にペルシャ帝国を築いたペルシャ人とは極めて近縁の部族である。

彼らは、紀元前14～15世紀頃にはザクロス山中に住んでいたが、紀元前8世紀に現れたダイウック(ギリシャの歴史家ヘロドトスが伝えるディオケス)が、メディア人諸部族を統一し、エクバ

タナ(現在のハマダン)を都とし、王国の基礎を置いた。しかし、その頃、オリエントはアッシリヤから興り巨大な版図を擁した軍事帝国アッシリヤの支配下にあり、そのため、メディア王国もアッシリヤの一つの属国に過ぎなかった。

ダイウック(ディオケス)の跡を継いだフラオルテスは東に南に王国の拡張を図るが、戦場で命を落とす。その子キュアクサレスは、紀元前612年、大帝国アッシリヤの都ニネヴェを、カルデア王国(新バビロニアと共同で襲撃して陥落させ、遂に、アッシリヤを滅亡させる。こうして、オリエントは、メディア・カルデア(新バビロニア)・リュディア・エジプトの4つの王国の併立の時代を迎える。そして、メディア王国の領土は、現在のイラン・アフガニスタン・パキスタン西部・トルコ東部にまたがるものであった。

しかしやがて、王国の東南部パルサの地にいたペルシャ人たちは、アカイメネス家を王にいただき、次第に王国を形作ってゆく。その4代目のカンピュセスはメディア王家の王女マンガネを王妃に迎え、その間にキュロス二世を儲ける。そのキュロス二世が紀元前550年、祖父の国メディアを戦いに破って併合してしまい、ペルシャ人の独立を獲得したのみならず、さらに、これを契機として、またたく間にリュディアを滅ぼし新バビロニアを滅ぼし、エジプトを除くオリエント世界を征服し尽くして、古代史上最後にして最大の帝国の基礎を築いたのである。

このようにして、メディア王国は史上から姿を消し、メディア人たちも、同じイラン系民族であるペルシャ人の中に吸収され一体化してしまう。

【ギリシャ悲劇の女性：魔女メディア】

アイスキュロス、ソフォクレスと並んで、ギリシャ三大悲劇詩人と云われるエウリピデスの代表的悲劇『メディア』は、不気味で残忍な魔女メディ



図2 『激怒のメディア』
ウージェーヌ・ドラクロワ、1838年

アの物語である。彼女は黒海の東にあるコルキスの国(現在のグルジアの西部)の王アイエテスの王女であり、伯母にあたるキルケから魔法を習って、それに長じていた。

他方、イオルコスの王子イアソンは、父亡き後、王位を継いだ叔父ペリアスによって、コルキスの国の宝である金色の羊毛の皮を奪い取ってくるようにとの難題を命じられる。イアソンを亡きものにせんがためである。コルキスは黒海の東にある国で、そこに行くだけでも容易でない上に、到着できたとしても、金の羊毛は巨大な悪龍によって守られており、その難題は死を命じたのと同じであった。

しかし、イアソンはギリシャ中から勇士五十人を集め、船大工アルゴスに作らせた大船アルゴーに乗って出航する。辛苦を重ねてコルキスの国にたどり着くと、コルキスの王アイエテスによって捕らえられてしまう。アイエテスは釈放の条件として、青銅の蹄と角を持ち火を吐く二頭の牡牛を取り鎮めて、その牛で畑を耕すという、出来そうもない条件を持ち出す。

この時、アプロディテ(ヴィーナス)の神は、イアソンに助力するために、息子のエロス(キューピッド)に命じて、アイエテス王の王女で女魔法使いのメディアの心臓に愛の矢を射込ませる。このためメディアは、たちまち、イアソンに燃えるような恋を抱き、父を裏切っても、魔法の知識のす

べてを傾けてイアソンを救おうと決心し、その独房に忍び込んで、火にも焼けず斬られても傷つかない魔法の塗油を彼の身体に塗り付ける。この助けによってイアソンはその難題をやりおうせて自由の身となる。さらにメディアは金羊毛が納めである花園にイアソンを案内し、魔法の呪文によって龍を眠らせ、金羊毛を盗み出させて、イアソンらと共に急いでアルゴー船に乗り船を漕ぎ出す。

アイエテス王は宝が盗み出されたことを知ると、船で後を追いかける。王の船がぐんぐん近づいて来て、いよいよ追いつかれそうになった時、メディアは、一緒に連れて来た幼い弟のアブシュルトスを抱き寄せると、やにわに、父の王の前で、鋭い刀で弟の胸を刺し、さらにその身体を幾つにも切り刻んで海に投げ込む。船のへさきに立ってその様子を見ていた父王は、船を止めさせ息子の亡骸を拾い集めさせる。その間に、イアソンらのアルゴー船は遠くまで進み追手を逃れる。

再び苦難の旅の末、やっとイオルコスに帰り着くが、ペリアス王は王位をイアソンに譲ろうとしない。そこでメディアは、魔法の力で王を若返らせるからとペリアスの娘たちを騙して、娘たちに王を殺させてしまう。

かねてからメディアの激しさに戦慄していたイアソンは、メディアと別れて、コリントの王女グラウケーと再婚しようとする。これを知ったメディアは、グラウケーに素晴らしい花嫁衣装を贈るが、グラウケーがそれを着た途端、花嫁衣装は紅蓮の炎と化し、娘を助けようと駆け寄った父王もろとも焼き殺してしまう。その上、メディアは、イアソンとの間に生まれた二人の自分の子供まで殺し、龍の引く戦車に乗ってイオルコスを去る。

古代オリエントの王国メディアは、人の世の栄枯盛衰を物語っている。ギリシャ悲劇の女性メディアは、人の心の愛憎の表裏を描きあげている。それらは、現代の情報メディアとどこか通じるものがあるのではないだろうか。

<参考文献>

- ・ 岸本通夫 『古代オリエント』(世界の歴史2) 河出書房、1968年
- ・ 山室静 『ギリシャ神話』(教養文庫) 社会思想社、1982年